

様式2 【生活様式などの無形のもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP公開 (可・否)

区分	1. 森づくり 4. 森と暮らし	2. 森の恵み 5. 森の文化財	3. 森と技 6. 森の風景
分野 (ふりがな)	(分野) 木地挽	(ふりがな) きじひき	
地域独特の呼び方	—	—	
タイトル	木地挽の山での仕事		
伝承地域	金山町山入 (町内一円)		
由来	<p>(いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで (いつまで) 伝えられてきたか)</p> <p>文化6年(1809)の「新編会津風土記」によると、天正18年(1590年)蒲生氏郷が会津に入封し、郷里である近江国から木地挽を呼んだとある。しかし、それ以前にも会津の木地挽はいた(地木地)。 本県の木地集落は、高杖(南会津町)、早稲沢(北塩原村)、弥平四郎(西会津町)など会津地方に多く分布していた。</p>		
内容	<p>(内容と共に、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども)</p> <p>轆轤を用いて椀や盆等の木工品を加工、製造する職人を木地師とか木地屋という。会津では「木地挽」と呼ぶ。明治以降に水車や電力等の動力が発達以前は、手引き轆轤が使われており、回転させる人と引く人の最低2人が必要であった。木地師の仕事場は、山での仕事と家(ジッキヤ)での仕事に大別される。普段は家から山に通って木地を取り、それを家に持ち帰り轆轤にかけて出荷した。</p>		
文化財等の指定状況	—		
問い合わせ先	金山町教育委員会	電話	0241-54-5333

【継承活動を行っている方がいる場合】

個人	氏名 (ふりがな)			※顔写真がありましたら、コピーか電子ファイルをご恵願います。(貼り付けずに、名前がわかるようにして同封ください。)
	性別・年齢	男 ・ 女	歳	
	生年月日	明治・大正・昭和・平成	年 月 日 生	
	住所・電話	〒	電話	
団体	職業			
	団体名 (ふりがな)			
	代表者氏名 (ふりがな)			
	団体の設立年月日	明治・大正・昭和・平成	年 月 日	
	問い合わせ先			電話

【フリーフォーマット】

キーワード

木地師の山での仕事

○アキガタ、アツガタとよきどめ（斧止め）

秋の彼岸の中日は村中休みとする。毎年廻り当番の家では、この日のために早くから大きな桶にどぶろくを用意する。

村中の人々はこの家に集まり、桶にザルを沈めてそこからメツパに酒を汲んで飲み交わし、一日中歓談する。

次の日から、積雪期間中の資材を家の中に運び込む山仕事を集中的に行う。

○小屋がけ

よきどめの次の日、山に入り、良木のある適当な場所に小屋がけをする。小屋は簡素なつくりであり、男一人が泊まりで作業ができ雨風をしのぐ程度のもので、9尺四方位の大きさである。木を立て、笹や萱で屋根と三方を覆い、土間には細木の丸太を並べ、その上に笹の葉を敷いてさらに笹を敷いた。小屋がけは、夫婦でだいたい1日で終了した。炊事やヨワリ（夜の仕事）は、したりしなかつたりと地区により差がある。また、この小屋を利用するのもしせいぜい20日程度だった。女は毎日家とこの小屋を往復するので、食事等の不便はなかった。

○柁をぶつ

仕事の最初は、まず木の素性を見ることである。これを柁をぶつと言い、めぼしい樹木にヨキを入れて木の柁目を判断する。柁目の良いものは、その後の作業を楽にした。何よりも良質の木地は良材あつてのことである。

○きかいし

木の伐採のこと。昔は伐採から荒型取りまでやっていた。鋸を使用するようになってから木地の取り方も多少変わった。伐採した原木は、数日乾燥させる（「水があがる」と言う）。

○玉切り

伐採し、ある程度乾燥したものを鋸で輪切りにする。寸法は製品によって異なる。

○ヤマドリ

鋸を使用する以前は、玉切りや分け型が違っていた。

原木を2メートルくらいの長さにし、それを2つ割りにする。それぞれの芯を除き直接ヨキで原木に型をとっていた。こうした荒型の原型取りを、ブンギリ・カタオコシなどと呼ぶ。

○分型（わけがた）つくり

玉切りで輪切りにしたものを、ツツン棒でワケナタをたたいて割る。



木地小屋(奥会津博物館)



木地小屋(奥会津博物館)